

学位論文要約

存在論的恐怖に対する対処方略の選択的反応

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 心理学分野
D173107 戸谷 彰宏

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 存在脅威管理理論

第 2 節 存在脅威管理理論の応用可能性

第 3 節 本研究の目的

第 2 章 存在脅威管理理論の文化的差異に関する議論

第 1 節 西洋文化圏と非西洋文化圏における知見の差異

第 2 節 日本における MS 操作後の防衛反応および感情反応の 検討（研究 1）

第 3 章 個人が依存する不安緩衝装置の検討

第 1 節 個人と不安緩衝装置の関係性に関連する要因

第 2 節 日本における不安緩衝装置の選択（研究 2）

第 3 節 オーストラリアにおける不安緩衝装置の選択（研究 3）

第 4 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

第 2 節 本研究の課題と今後の展望

引用文献

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 存在脅威管理理論

存在脅威管理理論 (Pyszczynski, Solomon, & Greenberg, 2015) によると、人は存在論的恐怖 (i.e., 死ぬ運命への恐怖) に対処するため文化的世界観、自尊心、親密な関係性という不安緩衝装置を発達させた。文化的世界観は、集団内の人々に共有されている現実についての信念である (Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 2004)。文化的世界観は直接的不死や象徴的不死の希望を与えるが、これらを得るためには、個人がその文化的世界観の価値基準に従っている必要があり、TMT ではこの感覚を自尊心と定義している (Pyszczynski et al., 2015)。また親密な関係性は、自身を超えた、より大きな社会的実体の一部であるという感覚を与えるなどの機能を持つ (Mikulincer, Florian, & Hirschberger, 2003)。

TMT から、“不安緩衝装置の機能を高めると、脅威場面において不安を低減する (AB 仮説)”，そして“死を顕現化させると (MS 操作)、不安緩衝装置の必要性が高まり、それらへの欲求が強まる (MS 仮説)” という仮説が立てられる。これらに基づき、当初は文化的世界観と自尊心の不安緩衝装置としての機能が、次いで親密な関係性の機能が実証されている (Pyszczynski et al., 2015)。

第 2 節 存在脅威管理理論の応用可能性

TMT の応用可能性として、人々が死の恐怖を感じるような出来事を経験した際の行動予測を行うことができる点が挙げられる。また近年では、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) は不安緩衝装置の崩壊が原因であり、その回復が PTSD 治療に役立つ可能性が指

摘されている(Pyszczynski & Taylor, 2016)。

第 3 節 本研究の目的

先行研究では、MS 操作の後に特定の不安緩衝装置を用いるかどうかを検討している。しかし現実では、いくつかの不安緩衝装置の中から個人が依存しやすいものを選択、利用していると考えられる。そこで本研究では TMT の実践的応用へ向け、不安緩衝装置への選択的反応を検討することを目的とする。

第 2 章 存在脅威管理理論の文化的差異に関する議論

第 1 節 西洋文化圏と非西洋文化圏における知見の差異

西洋文化圏では MS 操作により文化的世界観防衛が確認されること (MS 仮説の支持)、また自尊心が高い場合は文化的世界観防衛が生じないこと (AB 仮説の支持) が多くの研究で報告されている。しかし、日本を含む非西洋文化圏においてはそれらの知見が再現されにくい (Du et al., 2013; Yen & Cheng, 2010)。一方でその原因の 1 つとして、実験に用いられている MS 操作が上手く機能していない可能性も考えられる。Lambert et al. (2014) は MS 操作が fear を高めることを明らかにしている。もし MS 操作が非西洋文化圏でも適切に機能するなら、fear が高まると考えられる。

第 2 節 日本における MS 操作後の防衛反応および感情反応の検討 (研究 1)

目的

研究 1 では、非西洋文化圏である日本において (1) MS 操作が文化的世界観防衛を生じさせるか、(2) MS 操作による文化的世界

観防衛への影響を自尊心が調整するか、そして (3) MS 操作によって fear が生じるか、という 3 点を検討する。

方法

著者が過去に日本人を対象に収集した 5 つの実験データを用い (Table 1), メタ分析の手法による効果量の統合を行った。各実験の手続きは (1) 実験操作, (2) fear の測定, (3) 文化的世界観防衛の測定, (4) 自尊心の測定の順で行った。ただし実験 4 では実験を 2 週に分けており, 1 週目に自尊心の測定を行った。以下に, Table 1 に記載されている方法について詳述する。

実験操作課題 選択式の質問紙: 各条件に対応する選択式の 20 項目の質問に回答した (e.g., 脇本, 2009)。歯科不安条件は, MS 条件とは異なる不安を喚起させる条件である。余暇条件は, ニュートラル思考を喚起させる条件である。

自由記述式の質問紙: 各条件に対応する自由記述式の質問に回答した (e.g., Greenberg et al., 1990)。

fear の測定 46 項目の感情語から構成される尺度から, fear を

Table 1
研究1に用いた各データセットの要約¹⁾

データセット	実験	実験計画	手続き	対象者	N	実験操作課題	文化的世界観防衛
1	1	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	集団による質問紙実験	大学生	228	選択式の質問紙	
2	2 ²⁾	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	Web調査	20代	447	選択式の質問紙	集団自尊心尺度
3	2	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	Web調査	50代	456	選択式の質問紙	集団自尊心尺度
4	3	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	Web調査	20代	158	自由記述式の質問紙	集団自尊心尺度
5	3	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	Web調査	50代	162	自由記述式の質問紙	集団自尊心尺度
6	4	MS vs. 歯科不安 vs. 余暇	集団による質問紙実験	大学生	124	自由記述式の質問紙	エッセイ
7	5	MS vs. 余暇	Web調査	20代	130	自由記述式の質問紙	エッセイ
8	5	MS vs. 余暇	Web調査	50代	130	自由記述式の質問紙	エッセイ

1) fearの測定方法は各実験で同一であり, Lambert et al. (2014) の和訳版尺度を用いている。また自尊心の測定方法は各実験で日本語版ローゼンバーグの自尊感情尺度を用いているが, 実験5では2項目のみ用いている。

2) 検討点 (1)・(2)のメタ分析の際には, 配信上の不備によりサンプルの半数のみ用いた (20代, N = 222; 50代, N = 227)。

5項目で測定した (Lambert et al., 2014)。

文化的世界観防衛 集団自尊心尺度：渡辺 (1995) の日本語版集団自尊心尺度から 8項目を抜粋し，社会的カテゴリーへの評価を測定するように修正して用いた (Isobe, Ura, & Hasegawa, 2005)。参加者は自身の世代 (内集団)，そして他の世代 (外集団) に対して各項目に回答した。文化的世界観防衛得点は“内集団への評価－外集団への評価”により算出した。

エッセイ：日本を批判する内容のエッセイ (反日本エッセイ)，およびニュートラルな内容のエッセイ (統制エッセイ) を読み，その著者についての質問 14項目に回答した (e.g., Heine, Harihara, & Niiya, 2002)。文化的世界観防衛得点は“統制エッセイへの評価－反日本エッセイへの評価”の計算式により算出した。

自尊心の測定 日本語版ローゼンバーグの自尊感情尺度の 10項目を使用した (山本・松井・山成, 1982)。ただし実験 5 では，順項目と逆転項目を 1項目ずつ，計 2項目で測定した。

結果と考察

各データセットで目的変数を文化的世界観防衛，説明変数をダミーコード化した実験操作変数 (条件に所属 = 1, 条件に所属しない = 0)，自尊心の主効果，およびそれらの交互作用，また fear を統制変数とする重回帰分析を実施した。検討点 (1) は MS 条件変数の主効果の β を統合 (Table 2)，検討点 (2) は MS 条件変数と自尊心の交互作用効果の β を統合した (Table 3)。検討点 (3) については，MS 条件と他条件間の fear 得点における Hedges の g を統合した (Table 4)。日本人は MS 操作で fear を高めるが，文化的世界観や自尊心といった不安緩衝装置については，西洋文化

圏の人々とは異なった様相を持つということが示唆された。

Table 2

MS操作が文化的世界観防衛に与える影響のメタ分析結果 ¹⁾				
	<i>k</i>	<i>N</i>	β	95% CI
MS vs. 歯科不安	5	888	-.05	[-.12, .01]
MS vs. 余暇	7	1,148	-.03	[-.10, .05]

1) *k* = データ数, *N* = 総サンプル数, β = 統合したMS操作の効果, 95% CI = 統合した β の95%信頼区間。

Table 3

MS操作×自尊心の交互作用のメタ分析結果 ¹⁾				
	<i>k</i>	<i>N</i>	β	95% CI
MS vs. 歯科不安	5	888	.03	[-.05, .12]
MS vs. 余暇	7	1,148	.01	[-.05, .07]

1) *k* = データ数, *N* = 総サンプル数, β = 統合したMS操作の効果, 95% CI = 統合した β の95%信頼区間。

Table 4

MS操作がfearに与える影響のメタ分析結果 ¹⁾				
	<i>k</i>	<i>N</i>	<i>g</i>	95% CI
MS vs. 歯科不安	6	1,185	0.25	[0.11, 0.39]
MS vs. 余暇	8	1,355	0.38	[0.28, 0.49]

1) *k* = データ数, *N* = 総サンプル数, *g* = 統合したMS操作の効果, 95% CI = 統合した *g* の95%信頼区間。

第 3 章 個人が依存する不安緩衝装置の検討

第 1 節 個人と不安緩衝装置の関係性に関連する要因

MS 操作後の反応は、年齢世代によっても異なることが指摘されている。例えば、高齢者では文化的世界観防衛を行わないこと (Maxfield et al., 2007), MS 操作によって世代継承 (i.e., 未来の世代に貢献する) への関心を高めることが示されている (Maxfield et al., 2014)。未来の世代に強い影響力を与えるというような、死を超越した集団への同一視は象徴的不死の感覚を私たちに付与する (Maxfield et al., 2014)。これ以降の研究では、世代継承を 4 つ目の不安緩衝装置として扱うこととする。

また Hart, Shaver, & Goldenberg (2005) は文化的世界観, 自尊心, 親密な関係性を希求する程度を規定する要因として愛着スタイルを取り上げた。Hart et al. (2005) は愛着不安と愛着回避の 2 次元から愛着スタイルを捉え, 愛着不安が文化的世界観への希求, 愛着回避が自尊心への希求に関連することを示している。これら

を以降の研究では規定因として扱う。

第2節 日本における不安緩衝装置の選択 (研究2)

目的と予測

非西洋文化圏である日本の大学生・中年期・老年期を対象に、愛着スタイルを考慮したMS操作後の反応選択を検討する。予測に関連して、文化的世界観の妥当性を示すことや自尊心を希求することは自己主張的反応と捉えられる。他者との調和を重視する相互協調的自己観が強い場合 (Markus & Kitayama, 1991), それらへの希求反応は生じにくく, 反対に自己主張を重視する相互独立的自己観が強い場合はそれらへの希求反応が生じやすいと考えられる。なお, 本研究では個人内の相互協調的自己観および相互独立的自己観 (i.e., 相互協調性, 相互独立性) に焦点を当てる。

日本の大学生は相互協調性が優勢であり (高田, 1999), MS操作で親密な関係性を求めやすくなると予測できる (予測 1-1)。また, Hart et al. (2005) より愛着スタイルの調整効果も予測できる (予測 1-2), 彼らの知見では調整効果のあり方を明確に予測できないため, この点については探索的に検討する。

日本の中年期以降では相互独立性が優勢になる (高田, 1999)。この場合は Hart et al. (2005) から愛着不安が高い場合は文化的世界観 (予測 2-1), 愛着回避が高い場合は自尊心を求めやすくなることが予測される (予測 2-2)。一方で中年期は発達課題として生殖性 (世代性) が指摘されていることから (Erikson, 1950 仁科訳 1977), 世代継承を求めることも予測される (予測 2-3)。

老年期に関しては, Maxfield et al. (2007, 2014) の研究から, 世代継承を求めやすくなると予測される (予測 3-1)。

方法

参加者 日本の大学生 158 名 (女性 76 名, $M_{age} = 19.2$ 歳), 中年期 (40~60 歳) 177 名 (女性 63 名, $M_{age} = 50.8$ 歳), 老年期 (65 歳以上) 206 名 (女性 53 名, $M_{age} = 70.5$ 歳) を分析対象とした。

手続き 大学生は以下の手順で個別の実験室実験を行った。①個人差変数の測定：一般他者版愛着スタイル尺度 (中尾・加藤, 2004) によって愛着スタイル (愛着不安, 愛着回避), 独立・相互依存的自己理解尺度 (木内, 1995) によって文化的自己観を測定した。②実験操作：参加者を 2 条件 (余暇, MS) に振り分け, 自由記述式の質問紙を用いた (e.g., Greenberg et al., 1990)。③遅延課題：fear の測定 (Lambert et al., 2014), ワードサーチパズル (Arndt, Greenberg, & Cook, 2002) を行った。④反応の選択課題：文章作成を行ってもらおうと教示し, その際それぞれの不安緩衝装置に対応する 4 つのトピックから, 今最も書きたいを思うものを 1 つ選ぶように教示した。中年期および老年期については, 大学生の手続きに準じた Web 上での質問紙実験を行った。

分析方法 世代ごとに, 選択したトピックを目的変数, ダミーコード化した MS 条件変数 (余暇 = 0, MS = 1), 愛着不安, 愛着回避, およびそれらの交互作用を説明変数, fear を統制変数とした多項ロジスティック回避分析を行った。事前の予測に対応する効果について計画比較を行い, その際に検討すべき効果が複数にわたる場合は BH 法 (Benjamini & Hochberg, 1995) による p 値の調整を施した。また予測しない全ての効果について, BH 法による p 値の調整を施した探索的検討を行った。

結果と考察

大学生では、親密な関係性に対する世代継承との比較において、MS 操作×愛着不安の交互作用が有意であった ($b = 1.63, p_{adj} = .02$)。愛着不安が高い場合、MS 操作により世代継承を選択する比率が上昇した ($b = 1.85, p_{adj} = .03$)。一方で愛着不安が低い場合、反対の効果が有意傾向で認められた ($b = -1.28, p_{adj} = .07$)。また結果を説明しうる要因として、相互協調性と相互独立性の優位性を検討した。中点 (2.5) より高ければ相互独立性、低ければ相互協調性が優勢である。大学生では相互協調性が優勢であった ($M = 2.20, p < .001$)。世代継承と親密な関係性はともに、“他者と関わる要素を含む”とも考えられ、MS 操作で他者と関わる要素を含むトピックを選択しやすくなったと考えられる。

中年期では、文化的世界観に対する親密な関係性との比較において、MS 操作×愛着不安の交互作用が有意であった ($b = -1.39, p_{adj} = .03$)。愛着不安が高い場合、MS 操作により文化的世界観を選択する比率が上昇した ($b = -1.50, p_{adj} = .03$)。ただ予測とは異なり中年期でも相互協調性が優勢であった ($M = 2.41, p < .01$)。そのため、文化的自己観とは別の要因を検討すべきかもしれない。

老年期においては、有意な効果は認められなかった。また文化的自己観の優位性は認められなかった ($M = 2.47, p = .26$)。

第3節 オーストラリアにおける不安緩衝装置の選択(研究3)

目的と予測

西洋文化圏としてオーストラリアの大学生、中年期、老年期の人々を対象に、研究2と同様の検討を行う。予測として、まずオーストラリアのような相互独立的自己観が強い場合は、自己主張が重視される (Markus & Kitayama, 1991)。そのため大学生では、

MS 操作により愛着不安が高い場合は文化的世界観 (予測 1-1), 愛着回避が高い場合は自尊心を求めやすくなると予測した (予測 1-2)。中年期と老年期においては日本の場合と同様である。

方法

参加者 オーストラリアの大学生 (18~30 歳) 214 名 (女性 180 名, 不明 1 名, $M_{age} = 22.9$ 歳), 中年期 (40~60 歳) 251 名 (女性 151 名, 性別不明 1 名, $M_{age} = 49.67$ 歳), 老年期 (40~60 歳) 241 名 (女性 112 名, 不明 1 名, $M_{age} = 70.52$ 歳) を分析対象とした。

手続き Web 上での質問紙実験を行った。使用材料は研究 2 に準じていたが, 実験条件として歯科不安条件を追加した。

分析方法 研究 2 と同様に多項ロジスティック回帰分析を行った。ただし研究 3 では MS 条件を比較条件とし, 他の 2 条件と比較して同様の効果が認められた場合のみ, 採用することとした。

結果と考察

大学生では, 文化的世界観に対する世代継承との比較において, 実験操作×愛着不安×愛着回避の交互作用が, 歯科不安条件 ($b = -1.31, p = .04$) および余暇条件 ($b = -1.52, p = .03$) で認められた。愛着不安が高く愛着回避が低い場合, MS 操作によって文化的世界観を選択する比率が上昇することが, 歯科不安条件 ($b = 3.45, p = .03$), 余暇条件 ($b = 2.92, p = .04$) の両方で認められた。

中年期では有意な効果は認められなかった。老年期では, 親密な関係性に対する世代継承との比較において, 実験操作×愛着回避の交互作用が, 歯科不安条件では有意傾向 ($b = -0.89, p = .07$), 余暇条件では有意であった ($b = -1.17, p = .04$)。愛着回避が高い場合, MS 操作によって世代継承を選択する比率が上昇する効果

が、歯科不安条件 ($b = -1.12, p = .08$) および余暇条件 ($b = -1.30, p = .09$) の両方で有意傾向であった。文化的自己観については、どの世代も相互独立性が優勢であった (大学生, $M = 2.61, p < .001$; 中年期, $M = 2.72, p < .001$; 老年期, $M = 2.76, p < .001$)。

第 4 章 総合考察

第 1 節 本研究の成果

本研究は個人と依存しやすい不安緩衝装置の関係性を検討した。結果として文化・年齢世代ごとに愛着スタイル (愛着不安, 愛着回避) による不安緩衝装置の求めやすさが異なることが示された。日本の大学生では、他者との関係を含むものに不安緩衝装置としての重要性を置いていることが示唆される。一方でオーストラリアの大学生の場合は、特定の愛着スタイルに限定的であるが、文化的世界観への希求が認められた。また、中年期および老年期においては、大学生とは異なる結果となり、同文化内でも世代による違いが存在することが考えられる。本研究は TMT の実践的応用へ向けた基礎的な知見として位置づけられるだろう。

第 2 節 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題として、日本とオーストラリアにおける結果の違いを説明する要因を直接検討していない点が挙げられる。また、従属変数の測定に文章作成課題を使用したのが、個人の経験などがトピックそのものの書きやすさに影響した可能性がある。以上の課題点は残るが、本研究を発展させていくことで、PTSD への治療などへの応用や現実の人々への行動予測にも適用できる可能性があると考えられる。

引用文献

- Arndt, J., Greenberg, J., & Cook, A. (2002). Mortality salience and the spreading activation of worldview-relevant constructs: Exploring the cognitive architecture of terror management. *Journal of Experimental Psychology: General*, **131**, 307-324.
- Benjamini, Y., & Hochberg, Y. (1995). Controlling the false discovery rate: A practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society Series B*, **57**, 289-300.
- Du, H., Jonas, E., Klackl, J., Agroskin, D., Hui, E. K., & Ma, L. (2013). Cultural influences on terror management: Independent and interdependent self-esteem as anxiety buffers. *Journal of Experimental Social Psychology*, **49**, 1002-1011.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Rosenblatt, A., Veeder, M., Kirkland, S., & Lyon, D. (1990). Evidence for terror management theory II: The effects of mortality salience on reactions to those who threaten or bolster the cultural worldview. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 308-318.
- Hart, J., Shaver, P. R., & Goldenberg, J. L. (2005). Attachment, self-esteem, worldviews, and terror management: Evidence for a

- tripartite security system. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 999-1013.
- Heine, S. J., Harihara, M., & Niiya, Y. (2002). Terror management in Japan. *Asian Journal of Social Psychology*, **5**, 187-196.
- Isobe, C., Ura, M., & Hasegawa, K. (2005). Effects of intergroup and interpersonal context, and individuals' appraisal of their ingroup on the intragroup comparison process. *Asian Journal of Social Psychology*, **8**, 292-304.
- 木内 亜紀 (1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
- Lambert, A. J., Eadeh, F. R., Peak, S. A., Scherer, L. D., Schott, J. P., & Slochower, J. M. (2014). Toward a greater understanding of the emotional dynamics of the mortality salience manipulation: Revisiting the "affect-free" claim of terror management research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **106**, 655-678.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Maxfield, M., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Weise, D. R., Kosloff, S., Soenke, M., Abeyta A. A., & Blatter, J. (2014). Increases in generative concern among older adults following reminders of mortality. *The International Journal of Aging and Human Development*, **79**, 1-21.
- Maxfield, M., Pyszczynski, T., Kluck, B., Cox, C. R., Greenberg, J.,

- Solomon, S., & Weise, D. (2007). Age-related differences in responses to thoughts of one's own death: Mortality salience and judgments of moral transgressions. *Psychology and Aging, 22*, 341-353.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Hirschberger, G. (2003). The existential function of close relationships: Introducing death into the science of love. *Personality and Social Psychology Review, 7*, 20-40.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Pyszczynski, T., Solomon, S., & Greenberg, J. (2015). Thirty years of terror management theory: From genesis to revelation. *Advances in Experimental Social Psychology, 52*, 1-70.
- Pyszczynski, T., & Taylor, J. (2016). When the buffer breaks: Disrupted terror management in posttraumatic stress disorder. *Current Directions in Psychological Science, 25*, 286-290.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (2004). The cultural animal: Twenty years of terror management theory. In J. Greenberg, S. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of Experimental Existential Psychology* (pp. 13-34). New York: Guilford Press.
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 教育心理学研究, **47**, 480-489.
- 脇本 竜太郎 (2009). 存在論的恐怖が自己卑下の帰属および他者

からの支援的帰属の期待に及ぼす影響の検討 実験社会心理学研究, **49**, 58-71.

渡辺 聡 (1995). 日本語版集団自尊心尺度構成の試み 社会心理学研究, **10**, 104-113.

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Yen, C. L., & Cheng, C. P. (2010). Terror management among Taiwanese: Worldview defense or resigning to fate? *Asian Journal of Social Psychology*, **13**, 185-194.